

## 「全国健康むら 21 ネット第 5 回全国大会 in 大阪」

—4月23日にエルおおさか（大阪勤労者会館）で行われた大会のレポート—

今年は創立5周年記念の節目の年に当たり、メインテーマは「**日本再生—ところと食と健康—**」である。9時半の開場からどんどん人が入り、10時の開会では会場の6～7割の席が埋まった。午前10時小山登全国健康むら代表の開会挨拶、続いて健康むらとネット関係の島根県雲南市長速水雄二氏の挨拶の後、第1部「**少食は地球を救う**」のテーマで映画「不食の時代」の試写会が行われた。映画の上映に先立ち白鳥哲監督とモデルになった森 美智代さんの舞台挨拶があった。監督は映画制作の経緯を語った。幼児教育チャイルドアカデミーの開発者故七田眞氏の映画「魂の教育」を製作したときに氏から勧められ、森さんとの出会いを通して甲田療法を知った。七田氏は第3回健康むら大会に参加されて甲田療法と森さんを知ったのだった。その大会に七田氏を案内したのは実は私である。また映画の製作を資金面で支えたのは甲田先生が健康法を指導された（株）サンスター（健康道場）であった。いろんなご縁があって魂の出会いがあり映画完成に至ったのだ。

「世界には9億人の飢餓で苦しむ人々がいる。にもかかわらず日本では飽食に明け暮れ、余った物を残飯として廃棄し、その挙句食べ過ぎが原因で生活習慣病になっている。しかも食糧自給率40%しかないのに海外から金に物を言わせて買い漁っているのである。今こそ食を改めるべきである。食べるということは命を頂くことである。その原点を見つめよう。共鳴していただけたらこの輪を世界に広げたい。」と制作への熱い思いを語られた。

映画はモデルとなった森さんの闘病ストーリーの展開を中心軸に、甲田療法体験者達のインタビュー、昇幹夫医師（元気で長生き研究所代表）の解説、再現ドラマを挟みながら、甲田思想がナレーションにより語られている。うまくまとめられてすばらしい出来栄だ。が、最後が少し長いかなという印象を受けた。映画の後、昇医師の少食が何故いいのかをユーモアたっぷりに解説され午前の部終了。この映画は、秋から関東（横浜、渋谷）と大阪(十三)で一般公開される。（ウェブサイト参照）

第2部は「**健康社会への道**」と題しての講演。

最初の講演は、顧問の安保 徹氏（新潟大学大学院教授、免疫学）に「少食（生菜食）断食」を安保研究室の実験と自らの体験を踏まえながら、エネルギー生成系、ミトコンドリア、解糖系、何故ガンになるのか、をわかりやすく津軽弁訛りの独特の「安保調」でユーモラスに解説された。

次の講演は森谷敏夫氏（京都大学大学院教授、応用生理学）のチョコマカ運動のススメの話をも身振り手振りたっぷりに、舞台狭ましと自ら汗をかきながら観客を笑われながらの講演であつという間の1時間であった。最近日本人に糖

尿病が増加の傾向にあるが、その原因は遺伝や糖質の摂り過ぎではなく、脂質の摂り過ぎと運動不足であること、日本人はもっとお米（ごはん）を食べて運動するべきだ、という結論であった。

休憩を挟んで次の第3部「食は命なり」に入った。サブタイトルは「先達、先輩に学ぶ事例研究」第5周年記念特集のパネルディスカッションである。

コーディネーターは小山代表。最初にパネラーの保田 茂氏（神戸大学名誉教授、兵庫農漁村社会研究所代表）から問題提起として「いのちと環境創造型農業の取り組み」の話があった。私たちが健康で安心して暮らしていける環境を復活する取り組みとして、兵庫県の「コウノトリの野生復帰事業」を通して無農薬・少農薬農業を拡大し、コウノトリの餌であるドジョウやカエルがすすめる田んぼを広めることが必要であること。次に今までどの民族も経験したことのない超高齢化社会が日本に到来する。少数の若者で多くの老人を支えなければならない社会。しかも、経済はマイナス成長で給料は目減りしていく。税金は減り、借金大国で医療費は増加の一途、ガンや心臓病は増える一方。そんな社会でどうやって暮らすか。個人としては、病気になって家族や社会に迷惑をかけないように自立することであり、それには生きがいがあること。社会としては今後農林水産業が必要な時代になってくる。自給率を向上させる、医療費を増やさない取り組み（お金のかからない健康法）が必要である、といった内容。それを受けて、パネラーの奥田信夫氏（愛農学園高校校長）の農業後継者の育成についての取り組みと現状報告、佐藤喜作氏（日本有機農業研究会理事長）のミツバチがいなくなったこと、胎児性水俣病の話、有機農産物を買ってくれる人がいなくて有機農業をやめていく農家がいる現状の報告、消費者は買い支えをして欲しいことなど。森山まり子（熊森協会）は奥山の自然林の再生によりミネラル豊かな水を復活することが地力、生産力の再生、健康な農産物の生産につながる。そのためにトラスト運動を展開中、また会では月1回国民皆農の日を作り、里山の棚田で米づくりをやっている活動を報告。

私（血液循環療法協会会長）は臨床家の立場から、病気を早く治したり病気にならないためには自然治癒力を高める代謝酵素の材料であるミネラルが必要であり、そのためには自然森と（無農薬）農業の再生が最重要である。そのひとつの方法として、若い人たちが農業体験をやる運動を広げるべきだと提案。アメリカでは1977年マクガバン報告以来食生活改善に取り組み、日本食（玄米）が推奨され、ガンや心臓病は減少傾向にあるが、逆に日本では戦後欧米食が推奨されてガン、心臓病は増加の一方にあることを報告。

第4部は午後6時から会場を移動して大交流会と題し、健康むらの活動報告と各ボランティア団体との提携の道を探る提案を求めた企画であった。各団体の代表から会や活動の紹介などが発表されたが、提携の方向までは進展はなか

った。終了したのは午後8時半で、長い長い1日だった。スタッフを始め関係者の皆さんお疲れさま。かなり欲張りな企画であったが、健康問題は環境、食糧、農業、医療と総て関連し、今後どのように運動を展開するか、世話人達は自分の仕事を抱えながらの活動であり、スタッフ不足の中、一步ずつ進めるしかない。

(レポート 全国健康むら21ネット世話人 大杉幸毅)